

ニンフェアール 第10回公演
東洋と西洋の絃

2014年 7月20日(日) 17:00開演

主催:ニンフェアール 共催:宗次ホール 後援:名古屋芸術大学音楽学部
このコンサートはサントリー芸術財団の推薦コンサートです



ニンフェアール 第10回公演
東洋と西洋の絃

木村 麻耶
Maya Kimura
箏

佐藤 紀雄
Norio Sato
ギター

2014年 7月20日(日) 17:00開演

主催:ニンフェアール 共催:宗次ホール 後援:名古屋芸術大学音楽学部
このコンサートはサントリー芸術財団の推薦コンサートです

ご挨拶

本日はお忙しい中、ニンフェアール第10回公演にこ来場頂き、有り難うございます。2005年の第1回公演から毎年続けてこられましたのも、ご来場下さる聴衆の皆様の暖かいご支援の賜物であり、心から御礼申し上げます。

今回の演奏会には、国際的に演奏、教育活動を行うギターの佐藤紀雄さんと、箏の木村麻耶さんを迎えます。ギターと箏という全く異なった文化、歴史のなかで生まれた絃楽器によるユニークな組み合わせから生まれる新たな音響の可能性を、田中範康、水野みか子、エベルト・バスケス、伊藤美由紀の4人の作曲家が、各々の新作のなかで追求致しました。

また、各々の楽器の特徴的で複雑な音色をじっくり聴いていただけますように、ソロ作品、デュオ作品を交えてお送り致します。ギターと箏の編成による二重奏の古典作品は、音楽の歴史の中で存在しません。この編成による作品数は未だ少なく、本公演で新たなレパートリーとして3曲追加されることとなります。東洋と西洋の絃による繊細な音響世界を、ご堪能下さい。

2014年7月20日
ニンフェアール

ニンフェアール

2004年結成。ニンフェとは、フランス語で睡蓮(すいれん)の意味で、ギリシャ神話の乙女ニンフェともかけており、またニンフという単語にはさなぎという意味もあります。アールはフランス語でアートを意味し、私たちはこの団体のもとに、美しく新鮮で、これからの可能性を秘めた芸術作品を皆様にご紹介したいと願っております。国際的に活躍し愛知県にゆかりのある作曲家、演奏家に公演に関わっていただき、テクノロジーを利用したり、映像作家とのコラボレーション、ユニークな楽器編成など、毎回、個性的なアイデアで企画しております。

[ニンフェアール過去の公演実績]

★ニンフェアール第1回公演『古楽器の現在』(2005) 名古屋市港文化小劇場: ガース・ノックス(ヴィオラ・ダモーレ/ヴィオラ)、鈴木俊哉(リコーダー) ★ニンフェアール第2回公演『林、森、虹、息一声と弦による贈り物』(2006) 名古屋市港文化小劇場: 天羽明恵(ソプラノ)、鈴木大介(ギター)、後藤龍神(ヴァイオリン) ★ニンフェアール第3回公演『音とテクノロジーの対話』(2007) 愛知県芸術文化センター: 八木美知依(箏)、エリオット・ガッテンニョ(サクソフォン)、カール・ストーン(ラップトップ・ミュージック) ★ニンフェアール第4回公演『音の身振り・動きの響き』(2008) 名古屋市千種文化小劇場: 多井智紀(チェロ)、太田真紀(ソプラノ)、朝川万里(ピアノ)、神田佳子(タップ) ★ニンフェアール第5回公演『息の領域』(2009) 名古屋市千種文化小劇場: カミラ・ホイテング(フルート)、森川栄子(ソプラノ)、榎沢順(映像インスタレーション) ★ニンフェアール第6回公演『ACTIONS』(2010) 名古屋市港文化小劇場: 加藤訓子(打楽器)、ネイト・ペーゲル(ビデオ) ★ニンフェアール第7回公演『箏とピアノ・映像の融合』(2011) ソノリウム: 中村華子(箏)、朝川万里(ピアノ) ★ニンフェアール第8回公演『七夕に響く』(2012) 宗次ホール: 笹本武志(籠笛)、中村華子(箏)、中村仁美(箏) ★ニンフェアール第9回公演『Different Voices』(2013) 名古屋音楽学校ホール: 森川栄子(ソプラノ)、青山映道(クラリネット)

PROGRAM プログラム

1. 武満徹:『ギターのための12の歌』より (1977)
- ロンドンデリーの歌、イエスタデイ、ミシェル -
Toru Takemitsu (1930-1996): 3 pieces from 12 Songs for guitar (1977);
Londonderry Air, Yesterday, and Michelle
 2. 作者不詳:『乱』 十三絃箏の為の
Anonymous: Midare for koto
 3. 田中範康:『2つの存在』 (2014) ギターと十三絃箏の為の(世界初演)
Noriyasu Tanaka: The Two Existence (2014) for guitar and 13-string koto (W.P.)
 4. エベルト・バスケス:『浮世絵〜庄野の驟雨』 (2013)
ギターと二十五絃箏の為の(世界初演)
Hebert Vasques: Una lluvia repentina en Shono (2013) for guitar and 25-string koto (W.P.)
- 休憩 —
5. 水野みか子:『ベリーの館』 (2014) ギターの為の(世界初演)
Mikako Mizuno: Château in the Berry (2014) for guitar (W.P.)
 6. 伊福部昭:『物云舞』 (1979) 二十絃箏の為の
Akira Ifukube: Mono-iu-mai (1979) for 20-string koto
 7. 伊藤美由紀:『絃の独白』 (2014) ギターと二十五絃箏の為の(世界初演)
Miyuki Ito: Strings' Soliloquies (2014) for guitar and 25-string koto (W.P.)
 8. ヘンデル/ラゴヤ編曲:『シャコンヌ』ギターと二十五絃箏の為の
Georg Friedrich Handel (1685-1759) / Alexandre Lagoya (guitar transcription):
Chaconne (HMV435)

出演: 佐藤紀雄(ギター)、木村麻耶(箏)

PROGRAM NOTES

解説

1. 武満徹:『ギターのための12の歌』より (1977)

武満はコンサート用作品以外に映画音楽、ポップソングなども同じ情熱をもって作曲していたが編曲も多く行っていた。弦楽四重奏のための『枯れ葉』、『チャイコフスキーの四季より秋の歌』、合唱のための『さくら』など。今日演奏するギターのための編曲は『ギターのための12の歌』のなかに入っている。ギターという楽器を偏愛する武満は、一方でクラシック・ギタリストの、こり偏った価値観に少しばかり揺さぶりたいと、精神のエチュードの積りでこの12の歌の編曲をプレゼントしてくれた。しかし、出来たものは技術的な高さを要求されるものとなった。(佐藤紀雄)

2. 作者不詳:『乱』 十三絃箏の為の

乱は乱輪舌ともいわれ、段物といわれる箏の純粋器楽曲の名作のひとつ。段物とは、一段が五十二拍とする一種の変奏曲で、段を重ねていくごとに複雑になっていく。箏曲で有名な「六段」、「八段」など、各段が正確に五十二拍ずつなのに対し、この乱は段や拍数の制限がなく自由に曲が構成されているのが特徴である。また、一説によれば輪舌は林雪と書き、林の中に雪が降りつもった風情を作曲したものともいわれている。(木村麻耶)

3. 田中範康:『2つの存在』(2014) ギターと十三絃箏の為の(世界初演)

ギターと十三絃は、同じ発音原理をもった撥弦楽器の仲間である。それゆえ、実際に作品を書く上で、2つの楽器の音の美学をそこなわないようにするために、どのように音楽を構築したらよいかかなり悩んだ。そして、それぞれの楽器のあえて古典音楽を繰り返して聴く事で、今回の作品の方向性が或る程度定まったのだが……。結局、作品がとりあえず完成するまで、常に迷妄の世界を漂っていたような気がして、かなりしんどい思いをした。本作品は、2つの章からなっており、ゆっくりとしたテンポで展開していくI章は、II章の序章とも言える。また、I章で提示される様々な音群は、II章でも随所に様々な形を変えながら出現することで、両章を密接な関係にしている。そして、今回の作品では、あえて特殊奏法の使用を最小限におさえ、2つの楽器のかもしれないプリミティブで明瞭な響きを尊重したつもりである。最後に、今回の拙作の演奏をお引き受けいただいたお二人のヴィルトーゾ、佐藤さん木村さんに心より敬意を表します。二人の素晴らしい演奏が本作品の私の迷妄を吹き飛ばしてくれる事を期待して！(田中範康)

4. エベルト・バスケス:『浮世絵～庄野の驟雨』(2013)

ギターと二十五絃箏の為の(世界初演)

箏とギターの為のこの作品は、日本の浮世絵木版画に基づいた現在続行中の室内楽作品シリーズに含まれている。タイトルは、歌川広重の『東海道五十三次』の版画シリーズの有名な作品からつけられており、京都と江戸をつなぐ東海道にある45番目の宿場である庄野宿での突然、雨に降られた旅人一行を描いた作品である。私の音楽は、土砂降りから雨宿りの場所を探そうとしている人々の不安さのような、落ち着かない状況を描こうと試みている。この作品は、佐藤紀雄氏と木村麻耶氏に捧げられている。(エベルト・バスケス)

5. 水野みか子:『ベリーの館』(2014) ギターの為の(世界初演)

フランス中部に位置するベリー地方は、自然に育まれた野菜や果物、そしてチーズが美味なところだ。シェール県、アンドル県、ロワール県など、いずれも食の特産物で世界に名を知られている。15世紀に書かれた「ベリー公のいとも華麗な時祷書」には、色鮮やかな衣を身にまとった貴族たちが、食卓いっぱい並べられた御馳走を楽しむ様子が描かれている。そして、かつてのベリー州の州都ブルジュは、世界遺産の聖エチエンヌ・カテドラルを持つとともに、最近まで、電子音響音楽のメッカでもあった。もちろん、田園地方にそびえる城がいくつもあり、古い館の屋内や中庭での音楽会もしばしば催されている。爽やかなベリー地方の美しい城館を思いながら作曲した。本日演奏して下さる佐藤紀雄さんに心より感謝いたします。(水野みか子)

6. 伊福部昭:『物云舞』(1979) 二十絃箏の為の

物云舞は、今は残っていない平安時代の芸能で、即興的に何か物を言い、歌いながら、舞うものであったという。歌われる詩句はしばしば字足らずで、足りないところは舞だけやっとなと考えられる。つまり、ずっと歌いながら舞うのではなく、歌い舞う箇所と舞うだけの箇所のコンビネーションに物云舞の面白さがあつたと想像される。作曲家は、この絶えてしまった物云舞に思いを馳せ、しみじみ語り歌い舞うような部分と急速な所作だけのような部分の交錯する箏曲を仕立てた。大きくは緩急の組み合わせが二度繰り返される構成。緩も急も二度目の方が、より興がのって、規模も内容も膨らむ。(伊福部昭の音楽vol.2 より一部抜粋)

7. 伊藤美由紀:『絃の独白』(2014) ギターと二十五絃箏の為の(世界初演)

この作品では、ギターの最低音であるE音を基音とした16倍音をもとに、コンピュータで音にひずみをかけて計算し、圧縮、拡張し新構築された倍音構成の5パターンのヴァリエーションからのピッチ素材を、作品に使用している。複雑な音色を創造するために、コンピュータでの計算を1/4音(半音より狭い微分音)までと設定しているために、箏とギターの最初のチューニングに1/4音を取り込んでいる。分析結果の構成音の全てを縦の響きとして利用することは、今回の編成では不可能であるため、横の時間軸に再構成している。箏とギターの打楽器的なノイズ音と混ぜ合わせて音を濁らせることでピッチを揺らし微分音的な効果を試みている。

絃楽器特有の、ひずんだ音色、透明感のあるハーモニクスなどで絃の独白を表現している。佐藤紀雄さんに、拙作の『プロメテウスの光』からギターソロの作品を、去年から今年にかけて度々再演していただき、その演奏にインスピレーションを得て、今回新たな試みをしている。(伊藤美由紀)

8. ヘンデル/ラゴヤ編曲:『シャコンヌ』 ギターと二十五絃箏の為の

原曲はハーブシコード組曲のなかのシャコンヌであるが、それをフランスの稀代のギターデュオグループ、プレスティ/ラゴヤがギター二重奏に編曲したものを今回は箏とギターで演奏する。作品は主題と21の変奏からなるが、当時のシャコンヌの基本形式に基づき大きな三部分からできている。三つの部分は長調ー短調ー長調という教会建築をおもわせる壮大な形式をとっている。人によっては、それはキリスト教の三位一体になぞられると言う。(佐藤紀雄)

PROFILE プロフィール



佐藤 紀雄 :ギター

1951年生まれ。1971年(現)東京国際ギターコンクール優勝。以後、ギター演奏と指揮活動を広範囲に行ってきた。ギター演奏においてはクラシックレパートリーの他、武満徹、高橋悠治、近藤譲、松平頼暁、福士則夫、その他多くの作品の初演、また指揮者としても内外の新しい作品の初演を含め数多く演奏している。海外からの招聘も多く、これまでにパリ、ニューヨーク、ハンブルク、ロンドン、メルボルン、北京、メキシコ、デンマーク、フィンランド、エストニア、ブルッセル、アントワープ、ハバナ、イタリアなどでリサイタルや各地のアンサンブルと共演してきた。1997年にアンサンブル・ノマドを結成し音楽監督として毎年定期演奏会を開いてきた。またアンサンブル・ノマドでも海外から多く招かれ、ハッダースフィールド音楽祭、ガウデアムス音楽週間、モレリア音楽祭など主要な音楽祭で演奏してきた。1990年、京都音楽賞(実践部門賞)。1994年、中島健蔵賞。1996年、朝日現代音楽賞。2002年、アンサンブル・ノマドとして第二回佐治敬三賞を受賞。ギター・ソロのCD、アンサンブル・ノマドのCDなど多数リリースしている。桐朋芸術短期大学、青山学院短期大学、また日大芸術学部各ギター科で後進の指導にあたっている。



木村 麻耶 :箏

北海道出身。三歳より、箏・三絃・二十絃箏を橋本はるみ氏に師事。第28回全道三曲コンクール第1位。北海道新聞社賞受賞。をはじめ幼少より数々のコンクールで優勝、入賞する。第15回日独青少年コンサートに選ばれ、ドイツにて10日間に渡り、各地演奏する。ピエン・ナール(ロシア)出演。第35回釧路新人演奏会に出演、奨励教育長賞を受賞。セルバンデス文化センターにてギター・箏・尺八リサイタルを開催。財団法人地域創造邦楽地域活性化事業に参加し、熊本県の各地を回りアウトリーチやコンサートを行う。第17回賢順記念くまもと全国箏曲祭にて最高賞(賢順賞)受賞。現代音楽フェスティバルMaerzMusikより招請され、ベルリンにて演奏する。母校・中学校にてアウトリーチを行う。釧路音楽協会より記念表彰。平成24年度別海町文化奨励賞受賞。同年、地元別海町にて木村麻耶リサイタル開催。その他海外公演も多数。在学中に箏、十七絃箏、二十五絃箏を野坂恵子氏、滝田美智子氏に師事。現在、釧路音楽協会賛助会員。宮城会会員。生田流宮城社教師。4plusメンバー。



伊藤 美由紀 :作曲

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程修了。コロンビア大学(ニューヨーク)で作曲をトリストラン・ミュライユに師事、博士号(音楽)を取得。文化庁芸術家在外研修員として IRCAM(フランス国立音響音楽研究所)にて研鑽を積む。東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン(ニューヨーク)、アタック・シアター(ピッツバーグ)、オニックス・アンサンブル(メキシコ)、愛知芸術文化センターなどからの作品委嘱ほか、カーネギーホール(ニューヨーク)、レゾナンス・フェスティヴァル(パリ)、ISCM世界音楽の日々(香港)、国際コンピュータ音楽会議(マイアミ)、SMC(ギリシャ、スペイン)、Re:New(デンマーク)をはじめ、世界各国のコンクール、音楽祭に入賞、入選し、国内外で作品の発表を続けている。国際交流基金助成により、CMMAS(メキシコ国立音響研究所)でのレジデンシー、ジュラシ・アーティストレジデンシー(カリフォルニア)にて創作活動、作品発表も行う。ニンフェール、JUMPの代表として自主企画公演を定期的に国内外で展開。『時の砂』がALCD80からリリース。スウィーニ・ゼルボーニ出版社(ミラノ)から楽譜出版。『音楽現代』に「トリストラン・ミュライユの音楽的思考」ほか特集記事を執筆。現在、名古屋芸術大学、千葉商科大学、愛知県立芸術大学非常勤講師。日本作曲家協議会会員、先端芸術音楽創作学会会員。www.miyuki-ito.com



田中 範康 :作曲

東京生まれ。国立音楽大学作曲科並びに器楽科卒業。作品は、NHK-FM、アメリカ、韓国などの放送メディアや、国内はもとより、ドイツ(ベルリン、ボン、ヴァッサーブルク)、オーストリア(ウィーン、ザルツブルク)、フランス(パリ)、北欧(コペンハーゲン、オスロ)、ベルギー(アントワープ、ルーベン)、韓国(ソウル、テグ、マサン)、アメリカ(ニューヨーク)、メキシコ(メキシコシティ、モレリア)の音楽祭などで、広く紹介されている。オーストリアのVMM(Vienna Modern Masters)レーベルから室内楽作品集(Noriyasu Tanaka Chamber music)として、1994年にVol. I (VMM2011)、2002年にVol. II (VMM2036)の2枚のアルバムがそれぞれリリースされている。また2001年には韓国作曲家達と共に、詩人=李承淳氏とのコラボレーションによる、韓国伝統楽器によるアンサンブル作品「暗闇」がCDリリース(韓国)されている。2011年には、2002年より2009年までに発表された作品の中から、代表的な室内楽作品を収録したアルバム「田中範康作品集」(ALCD87)が、ALMレコードよりCDリリースされた。さらに年内に近年の作品を納めたCDがリリースされる。現在、名古屋芸術大学音楽学部、同大学院音楽研究科教授。日本現代音楽協会会員、日本作曲家協議会会員、日ロ音楽家協会会員。



水野 みか子 :作曲

作曲と音楽学の分野で活動展開中。東京大学文学部美学芸術学科、愛知県立芸術大学・大学院作曲専攻卒業・修了。音楽の空間性に関する研究により博士号(工学)取得。日本交響楽振興財団作曲賞、アルス・ポエティカ音楽祭などに入賞・入選。プールジュ国際電子音響音楽祭、CERPS、ISEA、ISCMをはじめ欧米各地の音楽祭、放送、作品保存などで取り上げられオーストリア、フランス、イタリア、イギリス、ハンガリー、モルドヴァ、アメリカ合衆国、オーストラリア、中国、台湾などで紹介されている。最近作品には、《Seven Temples》(2010、ISCM世界新音楽の日々)、トロンボーンとエレクトロニクスのための《masque》(2010、北京Musicacosustica音楽祭)、セントラル愛知交響楽団東京公演のための《尺八、箏とオーケストラのための「レオダマイア」》(2011)、電子音響音楽《String Space》(2012、アジア・コンピュータ音楽プロジェクト台湾大会)、コンピュータ・ネットワークと器楽のための《アクサライ I, II》(2013、あいちトリエンナーレ)、クラリネットとピアノのための《天空のハルモニア》(2013、宗次ホールランチタイムコンサート)などがある。平成19年度愛知県芸術文化選奨受賞。現在、名古屋市立大学芸術工学部芸術工学研究科教授。日本作曲家協議会、日本現代音楽協会、日本電子音楽協会、日本音楽学会、美学会、建築学会、情報処理学会、芸術工学会、各会員。